

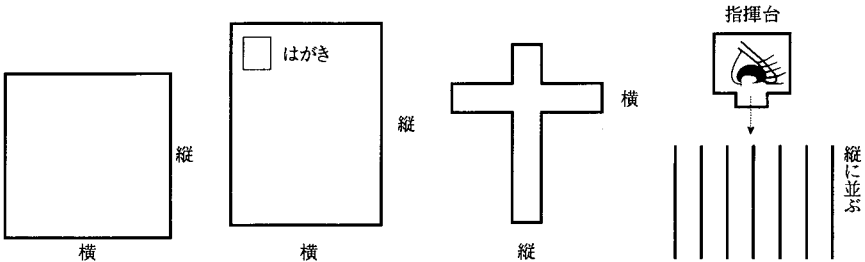
第2章・4節1)

「たて」「よこ」「ななめ」

前田直子

1. はじめに

「たて・よこ・ななめ」は、基本的には、平面における直線の方向の在り方を示す基本的な語彙である。このうち「たて」は「よこ」と対を成し、次のように対応する。すなわち、「たて」は「上下の方向」「垂直方向」の線であり、「よこ」とは、「左右の方向」「水平方向」を基本とする。従って、原則的には「たて」と「よこ」は直交する（森田 1987: 660）。



それに対し、直交しない関係が「ななめ」である。

これらの上下・垂直あるいは左右・水平の方向は、基準者の視点の方向によって設定される相対的なものである。

国広哲弥 (1982: 274) では、「縦」「横」の意味を次のように3つに分類している。

I 重力の方向を基準とする「絶対用法」

タテ〈垂直方向〉、ヨコ〈水平方向〉

例) タテ型のピアノ、ヨコの物をタテにもしない、ヨコになって休む

II 話し手の視点の位置によりタテ・ヨコの判定が変わる「相対用法」

タテ〈垂直な姿勢の話し手を基準にした前後方向〉

ヨコ〈垂直な姿勢の話し手を基準にした左右方向〉

例) タテ書き、ヨコ書き、タテ一列、ヨコ一列、カニのヨコばい

III 垂直方向・話し手の視点の位置とは無関係に、形そのものの特徴に基づく、「形態用法」

長方形・直方体の各辺の長さをもっとも長いものがタテ、二番目がヨコ（あるいはハバ）、立体の場合は三番目がアツサになる。

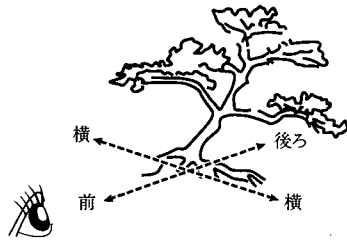
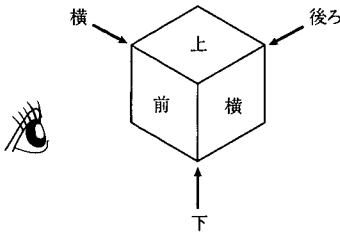
例) 反物のタテ糸とヨコ糸、タテ溝の付いた槍先

久島茂 (2001: 63) は、国広のⅠ・Ⅱを《空間的方向》、Ⅲを《形態的方向》と呼び、Ⅰ・Ⅱの「縦」「横」を、次のように捉え直している。


「縦」…1《上下》 2 水平面上の《前後》

「横」…1《水平》 2 水平面上の《左右》

さて、「たて」と「よこ」は対立・対応する関係にあるが、一方、「よこ」には、「前・後ろ」と対応するもう一つの意味がある。三次元的な空間認知において「よこ」の面は、「前」「後ろ」の面と対応関係を持つ。「前」は基準者の視点の方向であり、逆が「後ろ」、そしてその「前後」に対して左右の位置にあるものが「よこ」になる（森田：同上）。この「よこ」は「となり」「わき」とほぼ同義になる。



	後	
横	A	横
	前	

	後	
横		横
	前	



従来の研究では、「たて・よこ」あるいは「ななめ」という名詞が、どのような空間的位置にあるかが論じられ、それぞれの語の持つ本質的な意義の解明に十分な成果があげられてきたと言えるだろう。そこで本稿では、これらの語がどのような語とともに用いられるか、すなわち、どのような動詞と共起するか、伴う

格助詞は何か、また空間名詞どうしの組み合わせはどうか、複合語の場合はどうなるか、という観点から見ていきたいと思う。

2. 様々な構文的環境

「たて」「よこ」「ななめ」では、「たて」と「ななめ」がもっぱら「方向」を表すのに対し、「よこ」は「方向」に加えて「位置」を表しており、3つの中では特殊であることがわかる。位置を表すことばには他にも「みぎ」「ひだり」「まえ」「うしろ」がある。これに、二つの物体の位置関係を表す「向かい」、空間におけるある基準者から遠い部分を指す「奥」を加えて、まずは、伴う格助詞および動詞との意味的な関係に注目してみたい。これらの語彙が用いられる典型的な構文を示すと、次表のようになる。(▲は使用に制約があることを示す)

		たて	よこ	ななめ	右	左	前	後ろ	向かい	奥
A 存在場所	基準点の[空間名詞]に対象がある	×	○	×	○	○	○	○	○	○
	基準点の[空間名詞]に対象を置く									
B 動作場所	基準点の[空間名詞]で~する	×	○	×	○	○	○	○	○	○
C 移動の到着点	[空間名詞]に／へ行く・移動する	×	○	×	○	○	○	○	▲	○
D 移動の起点	[空間名詞]から来る	×	○	×	○	○	○	○	▲	○
E 視覚の方向	[空間名詞]を見る／向く	×	○	×	○	○	○	○	▲	○
F 主体移動の方向	[空間名詞](の方)に／へ進む(歩く・走る)	×	×	▲	○	○	○	○	×	○
G 動作の方向	[空間名詞]に切る・折る・破る・裂く	○	○	○	×	×	×	×	×	×
	[空間名詞]に引っ張る・押す	○	○	○	○	○	○	○	×	▲
H 程度副詞との共起	かなり／わりと／もっと／すこし／ずいぶん + [空間名詞]	×	×	○	○	○	○	○	×	○

「A 存在場所」「B 動作場所」「C 移動の到着点」「D 移動の起点」「E 視覚の方向」の場合、「たて」と「ななめ」は使えないが「よこ」は使える。これは「たて」「ななめ」が、基本的には直線の方角であるのに対し、「よこ」はその用法に加えて、位置関係を表す語彙でもあることによる。「右・左・前・後ろ」

も、全て方向・位置を表す語彙であり、この点で「よこ」はこれらの語の中間であることがわかる。

A 存在場所

「存在場所」を表す動詞には自動詞には「ある」「いる」の他、「座る」「立つ」などがある。「存在場所」をとる他動詞には「置く」「なげる」などがある。

(1) 机の横にゴミ箱がある。(主体の存在場所)

(2) 机の横にゴミ箱を置いた。(対象の存在場所)

同じく対象の存在場所を取る他動詞には「植える」「貼る」「並べる」などがあるが、これらは、「たて」や「ななめ」も取りうる。ただし、その場合は基準点は存在せず、対象と基準点との空間的な位置関係を表すのではない。次例に見られるように、複数の対象物間の位置関係や、対象物の在り方を表すもので、従って、存在場所ではない。

(3) 苗を {たて／よこ／ななめ} に植える。

(4) 壁にポスターを {たて／よこ／ななめ} に貼る。

(5) その前で四人の男が、津上たちの方は見向きもしないで、洗面所のタイルの流しを横にしたり、縦にしたりして取りつけ工事にとりかかっていた。
(井上靖「闘牛」)

こうした対象の在り方を表す動詞に「傾く」「ずれる」などがある。あるべき位置からはずれる様子を表すこれらの動詞は、「ななめ」とともに用いるのが最も適切である。

(6) 船が {??たて／よこ／ななめ} に傾く。

(7) 壁に貼ってあった額が {??たて／よこ／ななめ} にずれる。

「たて」「よこ」「ななめ」はこのような対象物の在り方を示す用法があるが、これは「右」「左」「前」「後ろ」にはない。「右」以下の語彙は、全て基準点に対する対象物の位置関係を表すものである。

B 動作場所 ・ C 移動の到着点 ・ D 移動の起点 ・

E 視覚の方向

続いて、「動作場所 (デ格)」「移動の到着点 (ニ／ヘ格)」「動作の起点 (カラ格)」および「視覚の方向 (ヲ格)」の場合を見よう。これらにおいても「たて」「ななめ」が使用できないのは、「よこ」が三次元の空間における平面の位置関係をも表せる語であるのに対し、「たて」「ななめ」は二次元の平面における直線方向を表す語であるからである。

(8) 母親の {たて／よこ／*ななめ／右／左／前／後ろ} で子供が本を読んでいる。

「奥」は「基準点+の奥」ではなく、「一定空間+の奥」という使い方になる。

(9) 部屋の奥で子供が本を読んでいる。

「向かい」はC・D・Eの用法で使いにくいように思える。「向かい」は基準点を必要とし、その位置と対象物の静的な位置関係・存在関係を示す語であるためであり、次のような例を表すには、「前」を用いる。

(10) ??向かいへ行く。??向かいから来る。??向かいを見る。

ただし「向かいに移動する」のように「向かい」が到着点として捉えられ、かつ、ある基準点の「向かい」である特定の場所（すなわち「向かいの位置、向かいの場所、向かいの席」など）であることが明らかであれば、使用できるであろう。

F 主体の移動の方向

「進む・歩く・走る」などの移動の動詞は、二格またはへ格（+「の方」）で「移動の方向」を表すことがある。人間にとって移動は前方が基本であるから「前」は当然可能であり、「右・左」は移動の方向を変更するという意味で可能である。

(11) 前（の方）に進む・右（の方に）進む

それに対し、「たて・よこ」は使いにくい。特に「たて」は動作主自らの進行方向を表すには用いにくく、「前」や「まっすぐ」のような副詞が使われる。ただし、あみだくじで「たてに進む」のように、動きを遠くから眺めるような場合には可能であろう。「横に進む」は左右のどちらかに進むの意味でなら可能かも知れない。それに対して、「ななめに進む」は原則として期待される移動が縦（曲がらないで視線の方向に進む）・横（曲がって進む）のどちらかである状況において、それ以外の前方方向、すなわち右前方あるいは左前方への移動を表す場合には使える。

空間内部の位置である「奥」は、「前」同様可能である。

(12) 奥に進む

主体の移動を表す場合は「向かい」は用いない。「向かい」が二つの物体の静的な位置関係を表すものだからである。

(13)* 向かいに進む

G 動作の方向

「動作の方向」においては、その動作の在り方によって、使用できる語が異なる。「切る・折る・破る・裂く」のような、軌跡が直線になって対象が二つに分離することを表す動詞と共起する場合は「たて」「よこ」「ななめ」が使用でき、「右」以下の、基本的に位置を表す語彙は使用できない。ただし、「折る」は、軌跡ではなく、方向であれば「右・左・前・後ろ」可能である。静的な位置関係を

表す「向かい」および、空間内の位置を表す「奥」は使用できない。

(14) ??折り紙を右に折る

(15) 帽子のつばを右に折る

ただし、「折る」ではなく「曲げる」であれば「右・左・前・後ろ」となじむ。「曲げる」が方向を変えるという意味を持つ性ではないだろうか。

「引っ張る」は「向かい」「奥」以外は可能である。「引っ張る」という動きが持つ方向性は、あらゆる方向で可能であるということを示す。「引っ張る」は語彙的に「奥」と共存しない意味要素を持つので「*奥にひっぱる」という言い方はできないが、「奥に押す／押し込む／つつこむ」なら可能である。

H 程度副詞との共起

「たて」「よこ」「ななめ」のうち、程度副詞と共起するのが自然であるのは「ななめ」である。「ななめ」は「たて」と「よこ」が90度で直交するのに対し、それ以外の角度で「たて」あるいは「よこ」と交わる関係にある。その角度の程度が程度副詞によって限定でき、この点で「ななめ」は位置ではなく、あくまで方向性を表す名詞と言える。「右」「左」「前」「後ろ」「奥」については、基準点との位置関係の距離・長さが程度副詞（例えば「もっと」など）によって限定される。

2. 方向・空間名詞どうしの複合

方向・空間名詞どうしが複合して、新たな方向・空間語彙を作ることができる。この組み合わせには、次の3つの場合がある。

第一は「ななめ」を前項とし、後ろにその他の言葉が続く場合である。

ななめ + よこ／右／左／前／後ろ／向かい

「たて」は「ななめ」と複合できない。これらの複合語はすべて空間における位置関係を示すため、空間における位置関係を示すことができない「たて」は用いられない。

第二は「右」および「左」が前項、「よこ」が後項の場合である。

右／左 + よこ／前／後ろ／奥

空間における位置関係を表す場合、「右」「左」は基本的には「よこ」の下位分類に当たるため、「よこ」の在り方をさらに詳しく示すために「右よこ」「左よこ」

という複合が現れるのであろう。また「右」「左」という関係は、水平方向における位置であり、それに前後方向の違いを加味するのが「右前」「右後ろ」それから「右奥・左奥」という複合である。

(16) L字型に右奥へ広がった大きな部屋のあちこちに、招待客たちの姿が散らばっていた。(「迷路館の殺人」綾辻行人)

第三は、第一と第二の複合をさらに組み合わせた次のような三者の複合である。

右／左 + ななめ + 前／後ろ／奥

「右ななめ前」とは「右前」と同じであると考えられる。「ななめ」は平面における垂直方向（前後）と水平方向（左右）の両方の方向性を持つものであるから、その両方向を「ななめ」と共に組み合わせることが可能である。それに対し、「*右ななめ横」という言い方ができないのは、「右・左」と「横」の方向性が同じだからであり、「右横」は「右」と同じであって、「ななめ」の方向性をもたないからである。

なお、今回は取り上げなかったが「となり」や「上・下」という言葉が複合語の後項に立ちうる。

(17) ななめ + となり／上／下
右／左 + となり／上／下

3. 熟語化

「たて」「よこ」「ななめ」は一つの組みになる概念であるが、さまざまな熟語において、これらが同様に用いられているわけではない。ここでは、熟語として用いられる語を見ることによって「たて」「よこ」「ななめ」の意味の在り方を考える。

3.1 「たて」「よこ」両方可能

いわゆるストライプ模様を表す際、「たて縞」「よこ縞」という言い方はできるが、「ななめ縞」という言い方はできない。「たて」と「よこ」は対をなすという語感があり、この二つが用いられる熟語的表現は以下のようにたくさん見られる。

(1) 訓読み (タテ・ヨコ)

～糸、～書き、～型、～罫、～軸、～皺、～線、～長、～幅、～笛、～揺れ
～穴 (cf. 竪穴)、首を～に振る、～の関係

(2) 音読み (ジュウ・オウ)

～隊、～断、

なお、穴の場合は「横穴・縦穴・豎穴」、障子の棧の場合は、「横棧・豎棧」と表記するようである。また移動の軌跡を表す場合は、「縦断・横断」には「縦貫・横断」という対応もある。

3.2 「よこ」のみ可能

興味深いことに「よこ」のみが用いられる熟語が多岐に渡って見られる。

(1) 複合動詞

～たえる、～たわる、～向く、～切る

(2) 動詞連用形との複合名詞

～合い（から）、～歩き、（太鼓を）～打ち、～組み、～好き、～座り、～すべり、～倒し、～倒れ、～抱き、～付け、～飛び、～取り、～流し、～流れ、～殴り（の雨）、～並び、～這い、～見、～向き、

(3) 名詞との複合による名詞

～顔、～紙、～木、～車、～つら、～っちょ、～っ腹、～手（よこて・よこで）、～雲、～波、～根、～本（＝横長の本）、真～、～道、～目、～メシ（＝西洋料理）、～文字、～物（額や掛け軸）、～槍、両～、～恋慕：～しま（ナ形容詞）

(4) 名詞としての用法

～になる、～に払う、～に倒す、（キセルを）～にくわえる、～に置く

「たて」は、人間の視点にとって正面方向の、自然な方向であり、従って無標であるのに対し、「よこ」はその方向とは垂直の、有標な方向として捉えられている。したがって、「よこ切る」という方向での移動はあっても「たて切る」はない。雨は上から下へ垂直に降るのが無標であって、そうでない有標の場合を「横殴りの雨」というように表現する。国広（1982）が指摘するように、「よこ」には、「横取り・横槍・横車・横恋慕・へたの横好き・話を横にそらす」のように、「好ましくない行動」という含みをもった比喩的用法が多い。また、「よこ」には、方向（例えば「横目」）、位置（例えば「両横」）、物体の側面（例えば「横っ面」）といった意味の多義性もある。このような「よこ」の有標性と多義性が、上のような熟語を多く生み出していると考えられる。

3.3 「たて」のみ可能

「たて」のみが可能な熟語はほとんどない。

「たて社会、たてわり」といった言葉は「よこ社会、よこわり」も存在するの
で、厳密には3.1に入れるべきかも知れないが、「たて」の方が日本社会では用

いられるようである。それは、日本社会が、対等な関係、ある組織と別の組織との緊密な関係を重視するのではなく、年令や職階などの上下の関係、その組織内でのまとまりを重んじることにに対して特に言及する際に用いられる。

また「たて結び」という言葉は、紐を結ぶ際には「よこ」があるべき無標の形であるのに対して、誤った形である「たて」の方が有標であるため、「たて結び」として表されている。「たてごと（豎琴）」も、伝統的な琴が弦を「よこ」すなわち水平方向に貼るのに対して、おそらく後に日本に入ってきた西洋のハープなどが「たて」に弦を張っていたことから、それを指す有標の語として「たてごと」が生まれたのであろう。

また「縦覧（じゅうらん・しょうらん）」という言葉がある。「自由に見ること。思うままに閲覧すること」の意であるが、伝統的に日本語が「たて書き」であったことから、「縦方向に読む」方向の言葉しかないのであろう。

3.4 「ななめ」の熟語

「ななめ」のみ可能な熟語も少ない。「ななめ読み」「ご機嫌ななめ」は、どちらも、正しい、望ましいありかたでないことを表している。音読みになるが、「斜に構える」なども同様の意味である。

また、「よこ」と「ななめ」が可能なものに「帽子を～にかぶる」がある。これも正しい帽子のかぶり方ではない様子を表し、反対概念は「まっすぐかぶる」である。

4. おわりに

以上、「たて」「よこ」「ななめ」を中心に、方向・位置関係を表す名詞を見てきた。この中では「よこ」の用法の多様性が目立った。「よこ」は方向を表す言葉として「たて」と対立し、位置関係を表すことばとして「まえ」「うしろ」と対立している。また、「よこ」には、否定的な意味が加わる場合が多々あり、多様な熟語において使われていることがわかった。

参考文献

- 久島茂 (2001) 『〈物〉と〈場所〉の対立 知覚語彙の意味体系』くろしお出版
国広哲弥 (1982) 「タテ・ヨコ」『ことばの意味3』平凡社
森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店